

未黒野 平成二十四年七月五日発行 第六十七巻第七号（通巻七九一号）

# 未黒野

すぐるの

7月号

（通巻791号）

桜

時

小川玉泉

石庭の白砂の筋目蝶生まる  
うぐひすや吟行日和賜りぬ  
Z旗にあふるる東風や三笠艦  
右書きの艦名みかさ鳥雲に

春光を巻き込み船の青水泡  
五歩あゆみては腰伸ばし花堤  
露座仏の鼻筋秀で花の山  
白じろと下弦の月や朝ざくら  
病窓の午後の明るさ花吹雪  
看護師の動ききびきび花の夕  
入院と決まりぬ花の吹き溜り  
花びらの舞ひ込み駅の昇降機

# 花水木

松本三千夫

推敲の珈琲を濃く月おぼろ  
練兵場跡のグランド花水木  
竹秋や海のひかりを雲に置き  
土牢に籠る潮騒花海棠  
朧夜の竹林星を掃くばかり  
春潮や逢魔が刻を巖噛んで  
すぐ上がる八十八夜の小糠雨  
竹の秋寺の孔雀の彩拵げ  
グランドの直線コース花水木  
山に来て海を見てゐる日永かな  
蝶と入る箱根関所の京口門  
緑立つまなじりを裂く日蓮像

# 甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）

## 囀

大橋伊佐子

犬ふぐり地上に星座描きけり  
むらさきの夜のとばりや丁字の香  
幻と消ゆ初蝶の纏れつつ  
翳深き大樹囀降らしをり  
雨雫光り木の芽の勢ひをり  
岩すべり来て輝けり春の水  
初花に明日は出あへる並木かな  
夜桜の揺れて零るる月の影  
飛花落花真つ只中に立ちつくす  
一湾を波のふちどる桜東風

## 苗木市

清海信子

川風にゆるくしたがひ雪柳  
座蒲団の小振りもよけれ梅見茶屋  
産声や万の木の芽の萌ゆる中  
二分咲きといへどこよなき花月夜  
陽炎を踏みて男女のかげろへり  
神鈴の時折り聞こゆ苗木市  
神官もまじり賑はふ苗木市  
仰ぐたび白を失ひゆく辛夷  
松籟を消し囀のひとしきり  
口すすぐ笕の水や花疲れ



# 乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）  
太字は推薦句

つばくらめ

森清信子

春疾風

吉田きみえ

町騒をたたみて夜の牡丹雪  
俎板に色移りくる蓬かな  
走る瀬の飛沫を浴びて路のたう  
囀のふくらむ小島海たひら  
三笠艦の小部屋にジオラ春ともし  
灯台の海知り尽くし鳥雲に  
濁流を一気に越えぬつばくらめ

沈丁花窓打つ雨の横なぐり  
木目見せ古き本堂梅明り  
花杏散り敷き昨夜の雨上がる  
バス降りて真向よりの春疾風  
手庇の夕日の一樹寺の梅  
春落葉踏みて墓参や父母眠る  
春の雨朝の手順の茶を入るる



落花 安齋久英

金色の蕊全しや落椿  
つちふるや戦に果てし誰彼を  
絵馬の文字薄れ落花の欲しいまま  
牧水の碑の裏を打ち春疾風  
道標に沿ひ春泥に合ふ羽目に  
退職の子の名紙面に春惜しむ  
花三楹寺院に甘き香を放ち

山桜 岡田史女

春光や菊の御紋の三笠艦  
タンカーの行き交ふ沖や昼霞  
けぶらへる東京湾や初つばめ  
ぜんまいや嘗て要塞てふ島に  
じやんけんの声のちらばるげんげ草  
せはしさの身のほぐれゆき山桜  
花冷えや電動ミシンきしみをり

春風 石黒興平

風光 岡野里子

春風をまとひ三笠の旭日旗  
砲口に蓋せし三笠のどかなり  
猿島のわけても高き初音かな  
島椿落つや磯波華やぎて  
どぶ板無きどぶ板通り万愚節  
春くや蛙合戦なほ止まず  
永き日の工具散りぼふ艇庫かな

要塞は戦の名残り落椿  
鳥の引く汀にあまた虚貝  
環海の青き島影風光る  
切岸の鵜の吹かれをり藪椿  
岩を咬む走り根太しおに蕨  
漣のひかりとろりと春の海  
竜天に登るや白き波頭

# 青炎集

## 小川玉泉選



横浜

倉橋千代子

横浜

梅田武

山里に行き合ふ藪の初音かな  
菜の花や畑に傾く猫車

芽柳のみどり煌めく瑞枝かな

**花弁を螺鈿のさまに濁り池**

山里の崖を賑はせ羊齒萌ゆる

声張りて梅林統る矮鶏の長

横浜

高橋

明

千葉

鈴木礼子

芽柳に飛び入る鳥の早さかな

製材の木の香の著く鳥雲に

畦径を蛙の声と歩みけり

冠省と書き花冷の中にをり

敷石の縁を色どる落花かな

**顔見せて足るる旅なり遅桜**

つり草に総身ゆだね花疲れ

**ひとつづつ撫でて球根植ゑにけり**

二十四の瞳なつかし岬の春

島暮れて春星赤く潤みをり

一年生ただいまの声透き通る

ポケットに子猫忍ばせ厨妻

明日雨といふ風向きや杉花粉

永眠の髪をなでをり白椿

真白なる風を見てをり雪柳

檜林芽吹くや御殿茶屋の跡

滔滔と用水満つる春田辺り

**水を張る田の面の光り雁帰る**



横浜 鈴木加代子

里山の空をささへて辛夷咲く  
まぼろしの夫の声かと初音聴く

**春めける色のあふれて華道展**

花堤上り下りの一万歩

花の散る水面をゆるり亀の首

飛花落花音もなく受け段葛

横浜 占部美弥子

武蔵野や古井の蓋の春落葉

白梅の香り古刹に広ごれり

源氏山の坂がかかる辺に山すみれ

**禅寺の空に溶けあひ山桜**

突と来る夫の病や夕桜

春光に居眠る夫や書を胸に

横浜 加藤八重子

人に慣れ目白の去らぬ梅日和

老いて子に従がつて居り涅槃西風

池の面に水輪を重ね春の雨

茎立ちの葉牡丹渦を緩めけり

**人を褒め褒め返されぬ梅日和**

何時になく胃薬ききぬ糸桜

横浜 大橋弘子

浮灯台ゆらりと春の波の上

**飛花落花墓碑銘永久に二等兵**

山うどを刻み夕餉の酔みそ和え

段葛万朶の花を見はるかす

初蝶や音なき風と共に去る

枝々の日差のまぶし猫柳

横浜 佐藤良二

春あらしコンビニの灯の煌々と

花疲れすんなり席を譲られて

名刹の暮色となりてさくら狩

春疾風重なる絵馬のおどりけり

**旬といふ声に惹かれて鱈買ふ**

春潮の満ちくる浜のめし処

鎌倉 福田房子

**笹鳴きや日の斑の踊る切通し**

春昼や隣家にピアノ調律師

うららかや孫のブーツをみがきをり

貝母咲きわが庭隅の賑はへり

言ひ訳は胸におさめん亀鳴けり

花筏崩し真鯉の沈みけり

# 耕 土 集

## 松本三千夫選



気仙沼の巨船無惨や陽炎ひて  
一つ摘み土筆を探す目となりぬ

横浜 山咲 和雄

梅一輪眼を開くやうに咲き  
春寒き瓦礫の上の巨船かな  
遊行寺の石畳舞ふ涅槃西風

隠れ沼や風に押さるる花筏

園田 恵子

田芹摘む籠に望郷あふれけり

三楹の花房赤し古刹門

田は畠に変はる浴線別れ霜

島つなぐ五橋の海や風光る

蟻穴を出でガリバーの靴に遭ふ

新宿 浅岡 麻實

持ち寄りの地酒自慢や花筵

闇ありてこそ夜桜匂ひたつ

ゆるぎなきものなぞありや亀の鳴く

春服や銀座を独り者めきて

どこよりか逸る水音桃ひらく  
磯宮潮風荒び松の芯

横浜 福永 幸子

種袋振つてみもする花舗の客  
花粉症治りて目鼻取り戻す  
巻貝の潮の匂ひや春休み

淡あはと山また山の桜かな

渡辺 絹代

あけぼのの街の静寂や初桜

幼子の鳩追ひかける花筵

猿島を登り下りて初音かな

要塞のつづく小径の初音かな

春風やホワイトデーの京最中

日野 中村 月代

春風邪の所為うっかりもちやつかりも

かぎろひの見えてカメラに阿夫利山

公魚の香そのまま賜りぬ

春うらら引越の荷の乳母車